様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０１６１

研究課題名（和文）地歌と地歌以外の三味線音楽との楽曲交流に関する研究

研究課題名（英文）Study on the mutual interaction between Jiuta and other Shamisen music

研究代表者
野川　美穂子（NOGAWA, Mihoko）

東京藝術大学・音楽学部・講師

研究者番号：５０２１８２９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円、（間接経費）　　360,000円

研究成果の概要（和文）：上方で発展した三味線音楽である地歌のレパートリーには、盲人音楽家によって作られた楽曲に加え、歌舞伎や人形芝居の音楽、遊里の座興の音楽など、地歌以外の三味線音楽から摂取した楽曲が多く含まれている。本研究では、そうした楽曲のうち、繁太夫物（18世紀前半に大坂で活躍した豊美繁太夫の繁太夫節に関連する地歌の楽曲）に焦点をあて、関連する文献資料と音源資料の収集と整理を行った。さらに、その資料をもとに、繁太夫物成立の経緯を推察し、繁太夫物の音楽的特徴を分析するためのモデルを提示した。また、中世から近世初期の流行歌謡を引用する地歌の長歌物などに対する分析、関連する新出資料の歌本・譜本の研究も行った。

研究成果の概要（英文）：The repertoire of Jiuta, which developed in the Kansai area, includes not only original pieces composed by blind musicians, but also tunes derived from other genres of Shamisen music, such as the music of Kabuki theatre, puppet theatre, and Yukaku entertainment music. In this research, focused on "Shigetayumono" --a group of tunes in Jiuta related to "Shigetayubushi" by Toyomi Shigetayu; who played an important role in Osaka at the first half of the 18th century--, documentary records and sound sources have been collected and classified. Based on those materials, the formational processes surrounding the genre "Shigetayumono" have been considered, and a method to analyze those musical characteristics has been proposed. Furthermore "Nagautamono" --a genre in Jiuta-- has been analysed in terms of its quotations of popular songs from the period spannng from the medieval to early modern periods.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：地歌　浄瑠璃物　三味線音楽　日本音楽　流行歌謡　繁太夫節

１．研究開始当初の背景

（１）地歌は、最も古い歴史を持つ三味線音楽である。多くの楽曲が伝えられ、それらは、歴史的背景、詞章や音楽の特徴によって、三味線組歌、長歌物、端歌物、作物、浄瑠璃物、手事物、謡い物、芝居歌物などの曲種に分類されている。野川は『地歌における曲種の生成』（第一書房、2006 年。日本学術振興会「研究成果公開促進費」による出版）において、歌本や譜本を資料に、地歌の曲種成立の歴史を研究し、地歌のレパートリーには、その伝承の中心を担った盲人音楽家の作品ばかりでなく、歌舞伎や人形芝居の音楽、遊里の座興の音楽など、地歌以外の三味線音楽から摂取した楽曲も多く含まれていることを明らかにした。地歌以外の三味線音楽から摂取した楽曲が多く含まれる曲種には「浄瑠璃物」「芝居歌物」があり、「長歌物」や「端歌物」にも一部、そうした作品がある。しかし、それらの曲種および作品に対する研究は遅れている。

（２）三味線音楽には、地歌以外に、長唄、義太夫節、常磐津節、清元節などのさまざまな種目がある。それぞれが独自の歴史と特徴を保持しているが、そのいっぽうで、ある種目の楽曲が他の種目のレパートリーに摂取された例、ある楽曲の一部の旋律が他の種目に引用された例も多くあり、種目間の交流が盛んに行われてきた。三味線音楽全体の有機的な結びつきに目を向けた研究が必須であるが、その進展は充分であるとは言えない。

２．研究の目的

本研究は地歌の曲種研究の一環である。地歌と地歌以外の三味線音楽との楽曲交流の経緯を解明し、交流から生まれた作品の詞章や音楽に如何なる特徴があるかを分析する。

曲種としては、とくに「浄瑠璃物」に焦点をあてる。浄瑠璃物には、17 世紀末から 18 世紀初めに活躍した初世江戸半太夫創始の半太夫節に由来する「半太夫物」、18 世紀半ばに豊美繁太夫が語った繁太夫節に由来する「繁太夫物」などが含まれている。本研究では「繁太夫物」を中心に研究する。また、地歌以外の三味線音楽との関連を持つ「芝居歌物」「端歌物」「長歌物」の作品も取りあげ、その特徴を分析する。

３．研究の方法

次のような方法で研究を行った。

（１）「浄瑠璃物」に関連する地歌側の文献資料の収集と調査、（２）「浄瑠璃物」に関連する歌舞伎や浄瑠璃側の文献資料の収集と調査、（３）「浄瑠璃物」に関連する地歌伝承者の芸談の整理、（４）「浄瑠璃物」の音源資料の収集と整理。（５）地歌以外の三味線音楽と関連する地歌作品の分析。

このうち（１）の文献資料には地歌の歌本や譜本が含まれる。『糸のしらべ』類、『糸のふし』類など、「浄瑠璃物」を収録する歌本や譜本を収集し、その分類状況を調査した。（２）については、国会図書館や大阪府立中之島図書館などに所蔵される浄瑠璃の丸本、歌舞伎の芝居番付を収集し、浄瑠璃物成立の背景を推測した。（３）については、浄瑠璃物を伝承する富筋の演奏家（富崎春昇師、初代・二代富山清琴師）の芸談を整理した。（４）については「浄瑠璃物」の録音状況を調査し、SP/LP レコードやカセットテープの形態をとるものは、利用しやすいＣＤの形態に変換した。（５）については、繁太夫物の《紙治》と《帯屋》、長歌物の《貴船》、端歌物の《機関的》、芝居歌物の《妹背川》をとりあげて、詞章と旋律の特徴を分析した。

４．研究成果

主な研究成果として、以下の９点が得られた。

（１）繁太夫物の音楽研究史の分析

兼常清佐『日本の音楽』（東京：六合館・服部書店、1913）、町田佳聲（博三）『江戸時代音楽通解』（東京：古曲保存会、1920）、藤

田斗南『箏曲と地唄の味ひ方』（大阪：前川合名会社、1930）、藤根道雄『豊後系の浄瑠璃　上』（LP レコード解説）（東京：ビクター、1964）、町田佳聲「三味線声曲における旋律型の研究」（『東洋音楽研究』第 47 号・第２分冊、1982）、徳丸吉彦「日本音楽における引用　あるいは間テキスト性」（東京：ぺりかん社、『日本の美学』12 号、1988）より繁太夫物に関する記述を抽出し、繁太夫物の音楽分析の研究史の特徴を分析した。

（２）地歌の歌本における繁太夫物の収録状況の調査と現存曲の整理

野川『地歌における曲種の生成』（前出）の研究をさらに進展させ、江戸時代の歌本において繁太夫物に分類されたことのある楽曲の一覧、明治以降に繁太夫物に分類された作品の一覧、現存曲の一覧を作成した。

（３）大阪府立中之島図書館所蔵の芝居番付の調査

大阪府立中之島図書館に所蔵される江戸時代の芝居番付より、繁太夫物の原曲につながる可能性をもつ歌舞伎の情報を収集した。その収集作業のなかで、地歌と歌舞伎芝居との交流を示し、既知の地歌の歌本には収録されていない《八文字》（小野村検校・浪野都作曲、中村芝翫舞、山村友五郎振付）という楽曲を発見した。

（４）繁太夫物の音楽的特徴を分析するためのモデルの構築

繁太夫物の主な音楽的特徴には、a. 詠唱を主体としながら、吟誦や朗誦も効果的に用いている、b. 歌い始めに「クル」唱法を用いる部分がある、c. 自由リズムの詠唱部分がある、d. 類型的な旋律型がある、の 4 点を挙げられる。本研究ではｄの類型的な旋律型に着目し、次の８点を軸に分析するのが有効であることを指摘した。①「繁太夫の手」（本研究の仮称）、②特定名称を持たないが、類型的に使われる旋律型（①を除く）、③ハジキを含まない同音反復、④ハジキを含む同音反復、⑤長２度・短２度の２音の組み合わせによる旋律型、⑥七五調詞章に対応する類型的な三味線のリズム、⑦キザミ、⑧他の種目での特定名称を持つ旋律型の引用（「ツキユリ」「三重」「オトシ」など）、⑨特定の種目の様式を意識した旋律型の引用（馬子唄、和讃など）。

（５）繁太夫物《紙治》と《帯屋》を例とする浄瑠璃と地歌の交流の経緯と音楽的特徴の研究

地歌《紙治》と《帯屋》は、詞章としては義太夫節の詞章の転用であるが、地歌の歌本や伝承者の口伝によれば、繁太夫物に分類されている。しかし、浄瑠璃側の文献に繁太夫節との関連を示す資料はない。初演および改訂再演時の義太夫節の丸本に記載される詞章と地歌の歌本に記載される詞章を比較し、また、それぞれの旋律を比較することによって、繁太夫節、義太夫節、地歌の三者をめぐる伝播の経緯を推測した。さらに、前掲（3）に提示したモデルに基づき、《紙治》と《帯屋》の音楽的特徴を分析した。地歌として伝承される過程のなかで、流儀や時代による旋律の変容や類型化があったことも明らかにした。

（６）天明２年成立の地歌の歌本『琴曲松のみばえ』についての研究

『享保以後大阪出版書籍目録』（龍渓書舎、1998 年）には「琴曲松のみばえ」と題する 2 種の歌本が記載されている。そのうち、板元・西澤九左衛門から 1757 年（宝暦７）9 月 15 日に改版の申し出があった一本に該当する歌本は、宮城道雄記念館に所蔵され、その存在が明らかになっている。しかし、板元・正本屋清兵衛から 1764 年（宝暦 14）五月に申し出があり、『琴曲鶴の齢』の改題増補本として刊行されたもう一本の所蔵は知られていない。野川が入手した 1782 年（天明２）成立の『琴曲松のみばえ』は、1757 年の前者とは異なり、1764 年の後者に関連する可能性

を持つ一本である。「新うた」と版心に記される 47 の収録曲の分析からは、芝居歌物が多く含まれている点、既知の地歌の歌本には収録されていない大黒舞に由来する楽曲が含まれている点などの特徴を指摘できた。地歌と地歌以外の音楽との楽曲交流がもたらしたレパートリーの多様化を示す歌本であることが明らかになった。

（７）京都府立総合資料館所蔵『三絃独譜』の研究

京都府立総合資料館に所蔵される『三絃独譜』は従来紹介されたことがない。三味線組歌の譜本『五線録』（明和６・1769）の異本と思われ、京都府立総合資料館に所蔵される『柳川流本手組大意全書』（明治 18・1885）と題する類書とも関連する。『三絃独譜』は、類書との比較により江戸時代の譜本と推測できるが、従来知られる『五線録』には含まれていない「三絃修業要法」という記述がある点を大きな特徴とする。地歌の専門家である盲人を対象に書かれており、三味線組歌を伝承する際の掟、三味線組歌以外の曲種の地歌を祝儀や遊興の場でどのように演奏すればよいかなど、盲人音楽家と一般の人々との地歌を介した交流の状況を具体的に読みとれる内容が記載されている。本研究では、その翻刻を行った。

（８）《貴船》と《機関的》を例とする地歌と流行歌謡の交流の研究

地歌の長歌物に分類される《貴船》は 1706 年（宝永３）に成立した歌本『若緑』に詞章が初出し、盲人音楽家の藤林検校の作曲と伝えられている。17 世紀前半から後半にかけての上演記録が残る歌舞伎の離れ狂言《貴船道行》との関連や、江戸初期の流行歌謡の歌本『長歌古今集』にも類似曲を見出せるが、それらと異なる特徴として、中間部の詞章に、流行歌謡の断片が複数引用されている。類似する詞章の断片は、中世に発する狂言歌謡、江戸初期の譜本に掲載される流行歌謡、各地に伝わる民俗芸能にも指摘でき、それらの詞章と音楽を比較して分析することによって、中世から近世にいたる歌謡の伝播の状況、三味線伴奏がもたらした歌謡の音楽的変容を推測した。

いっぽう、地歌の端歌物《機関的》の場合には、流行歌謡との関連を直接に示す詞章はない。しかし、三味線伴奏の旋律に伊勢音頭の旋律型が引用されており、その旋律型によって、詞章に描写される機関的の風俗が伊勢の風俗と解釈できることを指摘した。

（９）芝居歌物《妹背川》を例とする歌謡の伝播の研究

地歌の芝居歌物《妹背川》は、地歌歌本『吟曲端哥大全』（正徳・享保頃。1711－36）に詞章が初出し、『歌系図』（1782）には、水木辰之助の作詞、山本喜一の作曲、佳川検校・歌木検校の編曲と記載される歌舞伎由来の楽曲である。そのいっぽうで、《艶容女舞衣》（1773 年初演）、歌舞伎・人形浄瑠璃《競伊勢物語》（1775 年初演）などには劇中の地歌曲として登場する。音楽的には、巷間に流行した説経節との関連も推測できる。巷間の歌謡が歌舞伎の劇場音楽に摂取され、遊里や座敷で享受される遊芸の歌謡としても伝播したこと、その過程のなかで地歌に編入され、盲人音楽家から一般の人々にまで普及したこと、さらには、歌舞伎や浄瑠璃の一場面に、劇場音楽ではなく地歌として再活用されるにいたった経緯を指摘できる。地歌と地歌以外の三味線音楽との交流の一例として、その過程を分析した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

①野川美穂子「地歌の繁太夫物の特徴―旋律型を中心に―」、『三味線音楽の旋律型研究－町田佳聲をめぐって－（資料ＤＶＤ付）』、査読有り、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、2014 年予定、ページ未定。

②野川美穂子「近世邦楽の歌謡研究の視点－地歌の《貴船》と《機関的》を例に－」、『日本歌謡研究』、査読無し、日本歌謡学会、2013年、37－51ページ

〔学会発表〕（計４件）

①野川美穂子「近世の歌謡研究の課題－分野、表現様式、種目を横断する研究－」、日本歌謡学会、公開講演会ミニシンポジウム「近世・近代歌謡研究の課題」のパネリストとして、2014年5月31日、獨協大学

②野川美穂子「18 世紀の都市の遊芸」、日本音楽学会、ラウンドデーブル「「18世紀音楽」新考～地域を越えた音楽史学の可能性」のパネリストとして、2013年11月3日、慶應義塾大学

③野川美穂子「近世邦楽の歌謡研究の視点－「歌謡圏」が生み出した近世邦楽の特徴を捉えるために－」、日本歌謡学会、公開シンポジウム「日本歌謡学とはなにか－その課題と展望－」のパネリストとして、2013年5月19日、関西外国語大学

④野川美穂子「地歌の繁太夫物の旋律型について」、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター共同研究会、2012年1月29日、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター

〔図書〕（計１件）

①田中健次・徳丸吉彦・富山清琴・野川美穂子編著、勉誠出版、『地歌・箏曲の世界　いま甦る初代富山清琴の芸談』、2012年4月20日、278ページ （単独執筆１－36ページ、共同執筆37－278ページ）

６．研究組織

(1)研究代表者

野川 美穂子（NOGAWA Mihoko）
東京藝術大学・音楽学部・講師
研究者番号50218294